

-2022 年度教育職員特別研修報告書-

- ・法学部教授 リーア ギルナー
 (愛知大学人文社会学研究所) 1 【報告書】
- ・経済学部教授 李 泰王
 (ソウル大学日本研究所)
- ・国際コミュニケーション学部教授 北尾 泰幸
 (ハーバード大学言語学部) 3 【報告書】

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	リーア ギルナー	
所 属 ・ 職 名	法学部・教授	
研 修 期 間	2022年 4月 1日～ 2023年 3月 31日（365日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	Providing quantitative descriptions of phonological systems with a focus on global Englishes	
研修内容の概要	This research expanded upon findings obtained from Kaken grant (C)16K02776 in two major ways. First, it provided comparative data on the phonological systems of 10 varieties of English by means of a series of Functional Load (FL) analyses. In addition, it developed and explored a research methodology that can be applied to the task of characterizing phonological systems in the context of English lingua franca. The results of these analyses have provided the field with quantitative data that was not previously available.	
研修成果の概要	The primary results of this research have been explained and elaborated upon in three manuscripts: • Mergers and their consequences (published June 2022 DOI: http://dx.doi.org/10.13140/RG.2.2.16424.65288) These analyses have made it possible to envision some of the repercussions that mergers would have on the distribution of FL among the vowel phonemes in 10 varieties of English. The research questions guiding the discussion revealed certain trends across varieties that had previously gone undocumented. • Usage-based visual representation of phonological systems (published July 2022 愛知大学語学教育研究室「言語と文化」第46号) The visual representations introduced in this manuscript have added resolution to our understanding of the systemic relationships among phonemic contrasts in a variety of ways. By including FL values in the description, it has been possible to quantify the amount of change a particular merger would yield. It was observed that post-merger outcomes vary depending on the direction of the merger. This phenomenon had not been documented previously. • Vowel and consonant contrasts (published January 2023 愛知大学語学教育研究室「言語と文化」第47号) This manuscript provides a critical review of the steps taken by Brown (1988) and Catford (1987) to create their FL rankings, the go-to resources for second language pronunciation researchers. In addition, it presents FL rankings for vowel and consonant contrasts for 10 varieties of English obtained from a modern, usage-based, corpus-driven study intended to replicate the work of Brown and Catford (to the extent possible).	

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	李 泰王
所 属 ・ 職 名	経済学部・教授
研 修 期 間	2022年 4月 1日 ～ 2023年 3月 31日（365日間）
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. <u>海外特別研修</u> （海外の研究機関において研究する研修）
研 修 課 題	転換期韓国の産業構造に関する研究
研修内容の概要	世界の産業構造が転換期を迎えている現状をよりの確に捉えるために、まず台湾の半導体産業の国際分業の形態を分析し、米中摩擦下のグローバル・サプライチェーンの構造を明らかにした。また、自動車産業の電動化の実態を現場から調査・分析し、カーボンニュートラル化の可能性と課題を提示できた。
研修成果の概要	主な成果は以下の通りである。 ①2022年7月1日 講演会の講師 仁川大学中国学院主催「広域中華圏と東アジア専門家講演会」（オンライン）に講師として出席した。 ②2022年7月31日 『比較中国研究』第3巻第2号（仁川大）に論文掲載 韓国ジャーナルに論文を掲載した。대만의 전자 반도체 산업과 파운드리 공급망 구조 -Acer, Asus, TSMC, Foxconn 을 중심으로-（台湾の電子半導体産業とファウンドリ・サプライチェーンの構造 -Acer, Asus, TSMC, 鴻海精密工業を中心に-） ③2022年11月30日 韓国自動車部品メーカーの見学 自動車部品メーカーUNICK社を見学、聞き取りを行い、内燃機関車専用の工程に電器類の工程が導入されている現状を捉えた。 ④2022年12月7日 公開フォーラムのコメンテーター 「自動車産業連合フォーラム」でコメンテーターを務めた。韓国自動車産業の競争力を高める方策の1つとして労使関係の安定化を取り上げた。 ⑤2022年9月～2023年2月 著書の改訂増補版の校正 著書『「ものづくり」自動車産業論－ヒュンダイとトヨタ－』（中央経済社）を全面改訂し、2023年3月24日に第2版が発売された。 ⑥2022年度（通年） 韓国自動車産業学会の月例会などへ出席 韓国自動車産業学会の月例会と部会に出席し、講演者たちと親交を深め、自動車業界の動向を把握しようとした。 ⑦2023年1月13日 トヨタのディーラー取材（暁星トヨタ） トヨタ自動車の現地ディーラー社である暁星トヨタ取材した。トヨタ車の販売状況、レクサスとの差別化などの課題を捉えることができた。

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	北 尾 泰 幸	
所 属 ・ 職 名	国際コミュニケーション学部・教授	
研 修 期 間	2022 年 4 月 1 日 ～ 2023 年 3 月 31 日（365 日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③ 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	統語論における凍結原理の特性と WH 演算子の内的併合に関する研究	
研修内容の概要	1. ミニマリスト・プログラムにおける凍結効果現象の理論的解明 統語派生において、移動した要素が移動の条件を満たしたとき、さらなる移動あるいはその要素からの句の抜き出しが許されないことを規定した「凍結原理／基準凍結」がある。同原理で示される統語現象は厳然と自然言語に存在するが、統語派生に様々な制約が課されていた以前の理論的枠組みとは異なり、最適解の派生を探索モデルである現行のミニマリスト・プログラムにおいて、同原理をどのような形で統語計算モデルに位置づけるかが、大きな理論的課題となっている。本問題の解明に取り組んだ。 2. ラベル付け理論（標示付けアルゴリズム）の理論的妥当性の検証 Chomsky (2013, 2015, 2021) は、これまで統語派生において所与の条件として仮定されていた句のラベルを、最小探索（minimal search）という原理的な統語操作から導き出す理論モデルの構築を試みている。このラベル付け理論を詳細に分析して、同理論の妥当性を検証するとともに、上記の統語的移動にまつわる凍結現象に対して、ラベル付け理論を用いた理論構築に取り組んだ。	
研修成果の概要	研修内容 (1) の凍結効果現象の解明については、焦点句からの部分抽出に関して凍結原理の駆動に違いを見せる英語の <i>it</i>-cleft 分裂文を中心に考察し、統語派生における「代入構造」(substitution) と「付加構造」(adjunction) の違いが凍結効果の有無に関係することを明らかにした。同分析は <i>it</i>-cleft 分裂文と制限関係節における作用域の相違や、<i>wh</i> 句内的併合の違いについても正しく予測できるという帰結ももたらした。同分析は、以下の形で論文にして発表した（発表年月：2023 年 3 月）。 ・ Kitao, Yasuyuki (2023) “Subextraction and Freezing Effects in It-Clefts,” 『文学論叢』第160 輯、愛知大学人文社会学研究所、pp. 1-35.（査読付） 研修内容 (2) のラベル付け理論の理論的妥当性の検証については、同理論に関する様々な論文を検証し、同理論を自身の凍結原理の分析モデルに適用するべく研究を続けた。現在も研究を続けるとともに、ラベル付け理論による関係節および分裂文の統語派生に関する論文を執筆中である。	